

# アジア 海外の「水」に依存

## 3R技術 日本に高まる期待

「だが中国を養うのか？」。

米ワールドウォッチ研究所のレスター・ブラウン所長が、その著書で中国の食糧危機に警鐘を鳴らしたのは1995年だった。それから10年余。米農務省によれば、2008年の中国の牛肉消費量は約610万ト、ほぼ全量を国内の生産でまかなう。危機は杞憂に終わるのか。

農業・食品向け金融機関であるオランダのラボバンクの直近のレポートは、中国は農地や水資源の制約もあって、今後、牛肉の輸入を増やすだろうと指摘。西洋風の食習慣の広がり、マクドナルドの店舗が1千店を突破したことも紹介した。「警鐘」が問われるの

は、これからだ。

世界の水需給の将来を考えるときは、「仮想水」（バーチャルウォーター）というとらえ方が大切になる。仮想水（以下「水」とは、例えば牛肉なら牛の飲み水に加え、飼料栽培などに使う分も含めた水投入量を指す。東大生産技術研究所の沖大幹教授の試算によると、牛肉1キには20トの「水」が必要だ。肉を輸入するということは、そんな「水」を輸入していることでもある。

沖教授らが計算した主要地域間の年間の「仮想水」貿易（2000年）Ⅱ地図参照Ⅱでは、東・東南アジアは北米から785億ト、オセアニアから287億トの「水」

を輸入する。食料を海外に依存する日本の「水」輸入は、640億ト。アジアへの、この「水」の流れは将来、もっと太くなるだろう。

異常気象がいま以上にひどくなったとき、アジアはこうした「水」輸入を続けられるのか。水問題の専門家、グローバルウォーター・ジャパン代表の吉村和就氏は、将来的に「仮想水」の算出手法が整備されれば、「温室効果ガスで日本が他国から排出枠を買うのと同じように、仮想水輸入に多額の資金を支払う事態もありうる」とみる。

水不足や水質悪化に苦しむ人々は、すでに世界に10億人単位で存在する。異常気象でその深刻さはさらに増す一方、経済成長に伴う新興国のキレイな水需要の増大を

前に、海外の巨大資本は、世界各地で「水」をめぐる市場獲得に躍起だ。日本の水インフラなどの関連企業にも「商機到来」との声があるが、高度成長期に河川や湖沼の汚染と戦ってきた日本ならではの手法もあるのではないか。

水問題のジャーナリストの橋本淳司さんは近著で「日本には水の3R（リデュースⅡ節水、リユースⅡ再使用、リサイクルⅡ再生利用）技術という知恵がある。その考え方や技術ノウハウを深め、それを世界に発信すべきだ」と訴えている。中国については「不足しているのは技術者。日本は技術者育成にこそ協力すべきだ」と語る。

